

「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」における ヒューマニズムの本質

—その変遷と5つの特色—

The Essence of Humanism in ‘SAITO Kimiko and
Sakura/Sakuranbo Childcare’
: Its Transitions and Five Characteristics

木村 友紀

抄録

本研究は、戦後保育史において特筆すべき実践である「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の根底にあるヒューマニズムの本質を再定義し、その変遷と5つの特色の全体像を体系化することを目的とする。先行研究が「リズム遊び」に焦点が当てられがちであったのに対し、本研究は齋藤の著書・資料整理と関係者への聞き取り調査を通じ、その思想展開を包括的に分析した。その結果、まず実践体系の主要な構成要素として、「自然環境」、「リズム遊び」、「自由画」、「文化財」、「障害児・ゼロ歳児保育」の5つの特色を類型化し提示した。次いで、この5つの特色の実証的根拠に基づき、齋藤のヒューマニズムの本質を、「社会変革の視点」、「発達科学との統合」、「実践との不可分性」という3つの独自性を持つ理論的核として再定義した。本研究は、この理論的核と実践体系（5つの特色）との対応関係を論証することで、理念と方法論が有機的に統合された全体像を提示し、当該保育の本質的な理解と継承および今後の研究を推進するための、理論的基盤を明らかにした。

キーワード：齋藤公子、さくら・さくらんぼ保育、戦後保育史、保育者論、保育方法論

1. 研究の背景と目的

齋藤公子(1929年～2009年)が創始したさくら保育園、さくらんぼ保育園、第二さくら保育園の三園をはじめ、全国で同理念に基づいて実践されている保育は、一般に「さくら・さくらんぼ保育」と呼ばれている。この保育は、宍戸(1980:332)の『戦後保育史』において戦後の代表的な保育として取り上げられ、「子どもたちを人間として、一人ひとり主体的に形成しようとすることをはばむものへの闘い」として、高度経済成長期の保育課題に向き合う形で全国に広がり、実践園を大幅に増加させ、保育界に大きな影響を与えたと示されている。しかしこの保育実践は、その影響力に比して、学術的な検討が極めて少ないのが現状である。先行研究の多くは、入江(2022)、三村(2021)、今泉(2019)、和久田(2019)、吉田(2018)等、この保育の特色の一部である「リズム遊び」に焦点を当てており、齋藤自身の保育観や思想に根差した本質を捉え、その全体像を体系化した研究は乏しく、実際、惟任(2018)と原(2021)のもの以外

は、ほとんど見当たらない。惟任(2018)は当該保育を概観した内容であり、原(2021)のものは、齋藤が古生物学者の井尻正二から保育の示唆を得たものという特定のテーマから当該保育を検討した内容であるため、いずれもその理論的・思想的な本質を体系的に解明することを主眼とした研究ではない。また大戸(1980)は、その著書の中で当該保育の特色について述べているが、それは1980年以前のものである。一方で、現代の2025年においても、全国で多数の実践園が存在し続けているが¹⁾、こうした実践の多様さやそれに伴う解釈の違いは、一部で齋藤の保育の特徴を模倣する「教条主義的」な側面が見られるという指摘(原2021:27)の一因となっていることが考えられる。このことは、当該保育が戦後保育史において特筆すべき実践でありながら、その理論的・思想的な本質が学術的に未解明の状態にあり、実践の現場においても、時に方法論の表層的な模倣(教条主義)を招き、その理念の健全な継承・発展が危機に瀕していることを示唆している。以上の現状に鑑みれば、現在曖昧になりつつあるその保育の本質を再定義することが、教条主義的模倣の問題を克服し、実践の健全な継承・発展を保証するための喫緊の課題であるといえる。そこで本論文は、当該保育が1996年に活動を分化する以前の、創始者である齋藤公子自身の理念と、それに基づく実践の構造を理論的・体系的に確立することを基礎的な課題と位置づける。その上で、齋藤の著書、関連資料および、関係者への聞き取り調査を通じ、「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の実践の全体像を体系化し、その結果抽出された事実に基づき、根底にあるヒューマンズの本質を再定義することを目的とする。

まず文献分析においては、齋藤自身の保育観の変遷と実践構造を解明するため、齋藤の著作を中心に資料の収集・整理を行った。分析対象は、齋藤による主要な著書および保育内容を直接的に示す関連資料(後掲の「付録 齋藤公子の著書、映像、関連書」を参照)に限定して選定した。なお、当時の教育系雑誌等に掲載された短報や、各実践園が発行した記念誌・パンフレット等は多岐にわたるが、それらの全てを入手することが困難であるため、本論では一括して割愛する。また、実践園の保育者による当該保育に関する書籍、刊行物、記念誌、パンフレット等も多数存在するが、齋藤の著書以外の関連資料については、当該保育内容を直接的に示す書籍名に限定して選定した。これらの資料を年代順に構造化し、各時期における理念の変遷と実践の論理を抽出した。また、本研究における聞き取り調査は、文献資料の分析を補完し、当時の実践の細部や齋藤の言説を多角的に検証するために実施した。まず、2024年9月に計2回の半構造化面接を実施した。調査対象は、齋藤とともに40年以上にわたり「全国保育実践交流連絡会」(以下、「連絡会」)で実践を担ってきた園長経験者等、計6名である。合計面接時間は約162分であった。面接内容は、「さくら・さくらんぼ賛助会ニュース」等に記載されたエピソードの背景、齋藤から直接受けた指導の内容、および著書に記された方法論の具体的展開などである。これに加え、「連絡会」の正確な組織数を把握するため、別途「連絡会」会長への事実確認を行った。

次にヒューマンズムの定義について定義する。「ヒューマンズム(humanism)」とは、一般に

人間の尊厳や価値、可能性を尊重する思想であり、広義には人道主義を含む概念である(新村2018)。斎藤は、自らの保育を「真のヒューマニズムをめざす人間を育てる仕事」と位置づけており(柳田・斎藤1986:255)、その思想は今日まで「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の根幹をなしてきた。本論文では、この既存の理念を現代的な課題に即して体系的に記述し直すという意味において、改めてその思想の本質を再定義することを試みる。具体的には、斎藤の保育理念の変遷を辿り、まず主要な保育内容である「自然環境」、「リズム遊び」、「自由画」、「文化財」、「障害児・ゼロ歳児保育」の5つの特色を再検討し、そこから抽出された思想的な核に基づき、ヒューマニズムを再定義する。この理論的基盤の確立こそが、現状見られる多様な解釈や教条主義的な模倣の克服、そして学術研究における理論的解釈の曖昧さを解消し、当該保育に関する研究を健全に進める上での不可欠な第一歩となると考える。なお、当該保育は1996年以降、大きく2つに分かれて活動している現状があり、本章冒頭の三園と共に「連絡会」に所属する実践園と所属しない実践園に大別することができる(詳細は2章に後述)。本研究では、活動分化以前の斎藤自身の理念と実践構造の解明に焦点を絞るため、現在の両団体の差異に関する実証的な比較検討および、斎藤の引退後や没後の実践についての比較は、本論文の検討範囲外とし、今後の課題とする。また、一般にはこの保育は「さくら・さくらんぼ保育」と呼ばれているが、本論文においては、1996年以降の活動分化に伴い名称や解釈に差異が存在する現状を鑑み、創始者の理念の本質を追究するという立場から、斎藤や「連絡会」等に認められた実践と理念を総じて、「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」と呼ぶこととする。

本研究の新規性および学術的意義は、以下の3点に集約される。第一に、先行研究において網羅的な検討が行われてこなかった斎藤公子の著書および関連資料を、年代別に整理することで、その変遷を明らかにする点である。第二に、当該保育を実践する団体が1996年に大きく2つに分化・独立したという事実が、学術論文や一般販売書籍にはいまだ記録されておらず、一般的には両者が一括りに混同されがちであるという現状がある。本論文ではこの事実に関して、「さくら・さくらんぼ保育資料室」発行の「さくら・さくらんぼ保育資料室賛助会ニュース」や、斎藤の追悼文集からの引用に加え、先述の通り、当事者および1996年当時の保育者への直接的な聞き取り調査に基づき、その事実を明確に示す点である。当時の保育者は現在70代～80代であり、当時のことを直接質問できる本機会は、今後当該研究において貴重な貢献となることが考えられる。第三に、この保育実践を「ヒューマニズムに立脚」(斎藤・井尻1985:10)した体系として類型化し、その本質を提示することであり、これは1980年代以降、行われていなかった新たな試みである。先述の通り、当該保育は時に両団体が混同されたり、時に教条的に捉えられたりすることから、研究、実践においてその本質が曖昧になる可能性が示唆される。戦後日本の保育を代表し、現代においても継続している当該保育の本質を、根拠に基づき体系化することは、極めて意義深い。これらの知見は、今後当該保育を研究する上での重要な基礎となる。

なお、本研究の実施にあたっては、中国学園大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（2024年6月承認：G24002、および2025年2月承認：G24009）。調査に際しては、対象者にあらかじめ調査目的、自由意思による参加と撤回の権利、個人情報の匿名化、および研究目的以外でのデータ不使用について、口頭および書面にて説明を行い、同意を得た上で実施した。

2. 斎藤公子の保育理念の変遷と発展構造

本章では、斎藤の保育者としての活動内容や理念形成における重要な転機に着目し、保育理念の変遷を「理念形成期」、「理念と実践の相互形成期」、「理念の社会的展開期」、「執筆・発信期」、「継承と多層的展開期」の全5期に区分し、考察する。まず（1）の節において、斎藤個人の歩みを第1期から第4期まで辿り、次いで（2）の節において、実践団体の組織的展開を第5期（現在）まで記述する。

（1）斎藤公子の保育理念の変遷の時期区分

【第1期：理念形成期（ヒューマンイズムの基盤期）】（1920年～1955年）

斎藤は1920年に富山市で生まれ、大正デモクラシーの影響を受けた家庭で育ち、差別を憎み弱者を大切に作る心や、本物を見抜こうとする姿勢を培った。1937年に東京女子高等師範学校保育実習科で倉橋惣三に師事し、1939年に卒業の際、倉橋から盛岡市師範学校附属幼稚園主任に推薦されるが、当時の社会状況を反映し、「笑い声すら聞こえない」戦災孤児らが集まる託児所での実践を強く希望したため、固辞し（斎藤・川島1989:115）、その後結婚、出産、戦争、離婚を経験した。斎藤（2006:232-246）では、これらの苦労が「今日の私を育て」、その後「児童憲章を心に刻み」保育したと述べられている。1948年には社会福祉法人愛隣団で「尊厳をきずつけられ、いやしまれ、差別されてきた」戦災孤児と共に生活し、同法人の託児所で働く。小林宗作にリトミックを学び、児童美術の研究会に参加した。1954年10月深谷市の小鹿幼稚園で主任として就職。その傍ら、ぬいぐるみ作家として『主婦の友』、『暮らしの手帳』、『子ども部屋』に作品を掲載し、斎藤喜博の島小学校の実践や教育科学研究会で子どもの主体性や人間性を育む教育を学ぶ。しかし、1949年にエリート教育やしつけ教育を重視する園長との保育観の違いにより同幼稚園を解雇された（柳田・斎藤1986:159-162）。

【第2期：理念と実践の相互形成期（3園創設期）】（1956年～1976年）

同年4月に同幼稚園の保護者らが斎藤の保育を求め、さくら幼児園を設立し、斎藤は園長に就任した。その後1960年に園舎が全焼、1962年に保護者らと再建、経済状況に関係なく入園できる社会福祉施設に拘り、さくら保育園として認可を受けた。またその後、農繁期の子どもたちの姿を憂い、1967年に自宅を開放して大谷季節保育所を開設、1971年にさくらんぼ保育園として認可、さらに1978年には第二さくら保育園を設立、認可され、斎藤は3園の代表園

長を務めた。斎藤は保育所創りを、「身をけずるほどの痛みを伴う代償を要求されても屈服できない”生きたい” “創造したい” 内からの叫びの実現」(斎藤1982:250)と表現した。また保育者仲間と学び続けてきた斎藤は、1962年に北埼玉保育問題研究会³⁾を発足し、会長に就任した。高度経済成長期下、保育ニーズが障害児保育、産休明け保育と多様化する中、表1の教材による理論的学習の他、リズム遊び、歌、文化財の学習を積み重ね、また全国的な保育関連の研究運動に園全体で参加し、「保育を科学的に考え、発展させるための力をつける」ことに尽力した(原2021:26)。さらに子どもの権利に関する活動等に取り組み、斎藤の「思想と理論と方法」(広木1985:15)を築いていった。その保育は、『あすを拓く子ら』(斎藤・川島1976)の出版を契機に全国へ広まり始めた。

【第3期：理念の社会的展開期（「さくらんぼ坊や」制作期）】(1977年～1984年)

この時期の活動は、後にドキュメンタリー映画「さくらんぼ坊や」シリーズ(第3回東京教育映画コンクールで金賞)や、「アリサ ヒトから人間への記録」(キネマ旬報賞文化部門第一位を受賞)が上映、ビデオ化されたことを契機に、全国に広く普及した。これらの映画は、さくらんぼ保育園の子どもたちの成長、特に一人の子ども「アリサ」のゼロ歳児期から卒園までを追った記録であり、視覚的な記録を通じて、実践の質の高さと成長発達の明確な成果が広く認知されたことにより、「さくらんぼを知らない保育関係者はいない、と言われるほど」(宍戸2011:10)となった。斎藤が代表園長をつとめる3園は、全国からの見学者や、保育施設設立を目指す住み込みの実習生が後を絶たず、北埼玉保育問題研究会での学習を書籍化した「みんなの保育大学シリーズ」は増版を重ね、「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の実践園は全国に増加した。

【第4期：執筆・発信期（引退後）】(1985年～2009年)

斎藤は1985年に園長を引退、さくら・さくらんぼ保育研究所所長に就任し、全国への講演活動や保育活動、著作活動を続けた。また重度脳性麻痺児の保育に尽力し、2003年に内藤寿七郎国際育児賞希望大賞・生命の尊厳賞を受賞した。2009年(88歳)に自宅で死去するその日まで、保育の現役を貫いた(斎藤公子を偲ぶ会2010:42)。

表1 斎藤公子が影響を受けた主な自然科学・人文科学等の知見と文献

宮武辰夫『幼児の絵は生活している』博文社
ルソー『エミール』『ルソー全集』白水社
エンゲルス『猿が人間になるについての労働の役割』
イリーン『人間の歴史』
クルプスカヤ『クルプスカヤ全集』明治図書
マカレンコ『マカレンコ全集』明治図書
ダーウィン「成長相関の法則」
ポルトマン『人間はどこまで動物か』岩波新書
ヘッケル「反復説」
エドワード・セガン『障害児の治療と教育』
パブロフ『大脳生理学』
フレーベル『フレーベル全集』
ロバート・オーエン『ロバート・オーエンの教育思想』御茶の水書房
斎藤喜博『斎藤喜博著作集』
柳田謙十郎『労働と人間』学習の友社、『自然・人間・保育』あゆみ出版 『人間とは何か』創文社 等
井尻正二『ヒトの直系』大月書店、『ヒトの解剖』築地書館、『人体の矛盾』築地書館、『文明のなかの未開』築地書館、『井尻正二選集』大月書店
近藤四郎『足の話』岩波書店
清水寛『障害児教育とはなにか』青木書店、『セガン』

※本表は、斎藤公子が自著等で言及し、実際に読んだことが明確に確認できる文献のみを厳選して記載した。これらの著作には多数の版が存在するが、書誌情報（出版年、出版社等）については、斎藤自身の著書、対談、または参考文献リストにおいて、斎藤が実際に参照したと明記されている特定の版に関する情報に限定して記載した。斎藤が言及しつつも特定の版や出版社が特定できない文献については、出版社等の記載は行わず、文献リストに留めている。また、文学作品は割愛した。

(2) 「さくら・さくらんぼの保育」の実践団体の変遷

次に、前節で考察した斎藤個人の理念形成を踏まえ、その実践がどのような組織的広がりを見せ、1996年の活動分化に至ったかという、実践団体の変遷について述べる。斎藤公子は、戦後「人間を奴隷いにしてはならない。人間の自由をうばってはならない。人間を生きるしかばねにしてはならない。これが、私の保育の真髄である」（斎藤1982:248）と保育実践を始め、高度経済成長期には自閉症児の増加に直面し、「“人間の自然”を正しくとらえ、その法則を知り、正しく働きかけてこそ、すべての子どもの全面発達が保障される」との理念に基づき、学びと実践を重ねた（柳田・斎藤1986:5）。健常児に対しても、子どもが育つ当たり前の生活の減少と「うつろな瞳の子ども」の増加に直面し、「すべての者がときはなたれ、すべての子どもが心から笑い、生命輝かせて生きとおすことができる日を現実のものにするために」保育を構築し、発信し続けた（斎藤・川島1989:75、127）。

しかし斎藤は、1996年に現場保育者たちとの子どもの医療行為に関する実践活動の方向性の相違から活動を分化する。当時の園長らは、両者共に子どもの命を守ることを最優先にし

た結果の相違であり辛かったという気持ちと(さくら・さくらんぼ保育資料室2020:6)、2008年に和解した事実を綴っている(齋藤公子を偲ぶ会2010:81)。そのような経緯の中、1997年に実践園の保育者たちは全国保育実践交流連絡会を発足し、自分たちで交流、学習し、保育を創造することを目指し、現在まで活動を継続している。「連絡会」は全国10地区に分かれ、各地区で実践交流、研修会および、年長交流合宿を行う他、年2回の全国実践交流・研修会や各種冊子の発行も行う。この組織は、団体として約70年分の保育実践を蓄積しており、保育の科学的探求を継続している。具体的には、年長交流合宿では、各園の年長児とその担任、園長等で行う合同リズム遊び、お泊り保育、季節ごとの遊び(各地区によるが、川遊び、運動会遊び、スキー遊び等)を行い、夜は子どもたちの描画を並べて、子どもの育ちや保育内容を検討し、悩みを出して考えあったり、自園の報告等を行う。地区ごと、または全国での実践交流会や研究会においては、各園の全園児の描画を持ち寄って並べ、全体で各園の保育課題や進捗状況などを報告し、意見交流し、またその後各年齢別に全園が集まり討議を行ったり、講演から学ぶ等する。齋藤の没後は、「さくら・さくらんぼ保育資料室賛助会ニュース」⁴⁾を発行し、当該保育の本質、齋藤の言葉等を伝えている。⁵⁾

一方で、「連絡会」には所属しない「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の施設も存在する。これらは、1996年以降も齋藤に学び、単独、または他園と交流しながら実践している。齋藤の晩年のDVDブック制作に協力し、没後は齋藤から学んだ保育を書籍化したり、「齋藤公子保育自然学校」を運営し、講習会を開催する団体もある。このように「連絡会」とは異なる団体を形成し、独自に理念の継承と実践の運営を行う実践園も一部で存在しており、齋藤の保育実践の継承は、複数の団体や個別の実践園によって多様な形で図られていくこととなった。ホームページに当該保育名や当該保育の特色を提示しているものが数十カ園見られるが、保育施設によって取り入れた実践の範囲が一部であったり、独自の変化を試みていたり、全面的に継承を意図するものであったり、それぞれである。

2009年の齋藤の没後は、図1に「第5期：継承と多層的展開期」として示す通り、その保育実践の継承は、各団体によってより自立的かつ多層的に展開されることとなった。「連絡会」において、「さくら・さくらんぼ保育資料室」を設置し、齋藤の保育実践を体系的に保存・発信し続けようとする動きが見られるのと同時に、「連絡会」に所属しない施設や団体、個人においても、巻末付録の「第5期」の欄に示す通り、齋藤の保育内容を集成した書籍の刊行や講習会の開催を通じて、その理念を次世代へ残そうとする活動が継続されている。このように、現在の「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」は、複数の団体や個別の実践施設が、それぞれの解釈や状況に応じて多様な形態で理念を継承し、運営を継続している段階にある。

以上の齋藤個人の歩みと、実践団体の組織的展開を合わせた変遷を、図1にまとめる。

	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期
区分名	理念形成期	理念と実践の相互形成期	理念の社会的展開期	執筆・発信期	継承と多層的展開期
期間	1920-1955	1956-1976	1977-1984	1985-2009	2009-現在
組織の動き	個人活動	3園創設・実践体系化	全国への普及	1996年活動分化各団体による継承	
本論文での呼称	「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」				

図1 斎藤公子の保育理念の変遷と実践団体の組織的展開

(3) 理念の発展構造

次に以上を踏まえ、斎藤の保育理念の発展構造を考察する。第1期の戦争体験や戦災孤児との生活から形成された個人的信念を土台としたヒューマニズムは、第2期において、経済状況に左右されない保育園設立や障害児保育という具体的な社会変革的实践へと結実した。注目すべきは、この実践が単なる人道的活動に留まらず、同時期に北埼玉保育問題研究会を通じて、ダーウィンの進化論、パブロフの脳生理学、ポルトマンの人間学といった自然科学・人文科学の知見(表1参照)を徹底的に学び始めた点である。これは、ルソーの人間解放の思想とエンゲルスらによる唯物論的発達観を背景に、子どもの発達を生命科学として体系化し、実践の科学的根拠を確立するための試みであった。この動きは、「すべての者がときはなたれ」る社会を実現するためには、子どもの命を科学的根拠に基づき「全面発達」へと導く「思想と理論と方法」(広木1985:15)の確立が不可欠であるという、斎藤独自の危機意識と問題解決志向を示唆している。さらに、第3期に著書や映像作品(「さくらんぼ坊や」、「アリサ」)を精力的に発表した背景には、高度経済成長期において「うつろな瞳の子ども」(斎藤・川島1989:75)が増加する社会状況に対し、自身の確立した発達科学に裏打ちされた保育を、社会的インフラとして全国に普及させるという強い使命感があった。この時期に「みんなの保育大学シリーズ」として専門的な講義録を出版した事実は、「子どもの権利」を科学的に守るための理論と実践のセットを、現場保育者へと提供しようとした試みであり、斎藤の保育が表層的なメソッドではなく、学問的・哲学的基盤を持つものであったことを示している。そして第4期における、1996年の現場保育者たちとの見解の相違と、それに続く実践団体の分化は、斎藤のヒューマニズムと発達科学の統合という理念が、創始者である斎藤自身のカリスマ的指導から離れ、現場の保育者たちによる集団的・自立的な保育の科学的探求へと移行し始めたことを意味する。この理念と実践の継承は、分化以降、現在に至る第5期まで、組織的な活動や個別の活動という多様な形態を伴い、多層的に展開されている。これは、理念が継承の危機に直面する一方で、その理念が本質的に持つ体系性と、集団に内包された民主的な自治の体質が相まって、創始者の影響下から自立して継続・発展していく可能性を示した重要な事例である。つまり、斎藤の保育理念は、個人的信念から始まり、科学的裏付けを経て、最終的に集団的实践へと昇華・変容していくという、戦後保育史における一つの理想的なモデルケースを提示したと言える。

3. 「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の実践体系：主要な5つの特色

本章においては、前章で考察された齋藤の保育理念の発展構造に基づき、文献研究により、当該保育を構成する主要な要素を体系として捉える上で不可欠な5つの特色に類型化し、その概要を提示する。

(1) 5つの特色の抽出根拠

「齋藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の実践を構成する主要な要素として、「自然環境」、「リズム遊び」、「自由画」、「文化財」、「障害児・ゼロ歳児保育」の5つを抽出した。これらが体系的に捉える上で不可欠な特色である理由は、以下の通りである。まず、「自然環境」、「リズム遊び」、「自由画」、「文化財」という4つの特色は、当該保育の「理念の社会的展開期」にあたる文献の根拠(宍戸1980:328-329)における「戸外でのあそびや作業」、「絵による表現活動」、「リズム運動」、「すぐれた文化財」という4つの特色とほぼ合致しており、齋藤の現役中からこれらが保育内容の核として広く認識されていたことを示している。本論文においては、齋藤公子自身の著作やDVD等における一貫した用語使用および、現在の「連絡会」等の実践現場において共通言語として定着している呼称に準拠し、これらの名称を採用した。例えば、宍戸のいう「戸外でのあそびや作業」は、齋藤の実践において著書や資料の中で、土・水・太陽といった「自然環境」との相互作用が本質的であると説かれている点に鑑み、より実践の核心を突いた用語へと精査した。また、宍戸のいう「絵による表現活動」について、本論文では「自由画」という用語を採用した。齋藤の著書や実践現場では「自由画」と「描画」が併用されている。しかし、本研究では齋藤(1982)の思想に基づき、呼称を「自由画」に統一する。齋藤は、大人の教え込みではない子ども自身の主体的な表現を極めて重視し、描画指導のあり方を厳しく問い直してきた。この理念をよりの確に反映する文言として「自由画」を選択した。また、齋藤自身が晩年の総括的見解として制作に携わった『DVDブック 映像全集・齋藤公子の保育』(齋藤2021)や、『映像で観る 子どもたちは未来』(齋藤・小泉2008、2009)においても、これら4項目が主要なテーマとして一貫して取り上げられている⁶⁾。さらに、本研究では、齋藤の実践を構成する主要な特色として、「障害児・ゼロ歳児保育」をこれら4要素に加えた。その意義は、齋藤の保育実践を、特定の活動内容(リズム遊び、自由画等)と、それらが特に先鋭的に展開される実践領域(障害児・ゼロ歳児保育)の両面から構造的に捉え、「ヒューマニズムに立脚」(齋藤・井尻1985:10)した統合的な実践体系として捉え直す点にある。齋藤は「私の保育の特徴は、さくらんぼ保育園の乳児室にある」(原2011:53)と述べているが、これは場所の指定に限らない。齋藤にとって、生命の起源に近いゼロ歳児の保育と、発達の困難を抱える障害児の保育は、ともに人間発達の原点を科学的に探求し、その可能性を最大限に引き出すという一点において本質的に共通する実践領域であった。こうした弱者に手を差し伸べる徹底した姿勢は、人間発達を科学的に保障しようとする齋藤のヒューマニズムの象徴である。したがって、これら5つの要素は、齋藤の保育実践を構造的に捉える上で不可欠な柱であるといえる。

(2) 5つの特色の概要

1) 「自然環境」について

宍戸(1980:332)は、「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」が、ルソーの『エミール』から学び、「失われつつある自然の中で子どものための自然を確保し、子ども生来の姿をとりかえそうとする先進的な試み」であると述べた。地域の遊べる野山の減少から園庭の起伏を重視し、倉橋惣三の教えを汲み、自由に登ったり掘り返したり水を流して遊べるようトラック数台分の土を盛った築山を設ける等、意図的に環境を整えている。また檜の床の園舎、人工添加物や白砂糖を使用しない新鮮で自然の素材を活かした食事、汗腺の邪魔をしない衣服等を大切にし、斎藤は「本物の太陽、土、芝生、檜の床を全身に感じさせ(中略)、優れた環境で優れたリズム遊び、そして健全な食事が続けられれば、体、特に脳や神経系の発達が実現される」(斎藤2021)とまとめた。

2) 「リズム遊び」について

斎藤は高度経済成長期下で「ひ弱な生命力しか与えられず」生まれた子どもたちの卒園期の全面発達の姿は、ゼロ歳児からのリズム遊び抜きに語れないと述べた(斎藤1994: 9-10)。そして「すべての人々が自由で平等な社会が達成されるためには、人間の豊かな育ちが必要であると考え」(原2021: 23)、「リズム遊び」を考案後、改良していった。ピアノに合わせて動物等の動きを真似たり、わらべうた遊びや民族の踊りを取り入れる等する「リズム遊び」の原型は、東京女子師範学校保育実習科の戸倉ハルの「自由表現と集団遊び」、石原キクがアメリカから持ち帰った「律動」、小林宗作から学んだ「リトミック」であり、その後、柳田謙十郎、井尻正二、近藤四郎らに「子どもは絶え間ない自発的運動の中で自らを育てていく」こと、異年齢集団での模倣力を活かすこと等を学び、子どもが思わずやりたくなり、憧れて成長し、みんな決めて「あくまでも子ども主体」のリズム遊びを形成した。また「個体発生は系統発生を繰り返す」という反復説に学び、「脊椎動物の進化の過程で必要であった」足の親指とその付け根で地をけて前進する動きや、子どもが歩行を獲得するまでの「自然な移動運動」の動作等を、「リズム遊びに仕立て」た。そして感覚神経と運動神経の発達が就学までの時期の土台になると考え、「すべての感覚を活発に働かせ(中略)、すべての筋肉、骨格、神経系を使いこなすこと」を目指し、時代に応じて「進化発展させてきた」(斎藤1994:11-48)。「リズム遊び」については、「幼児期運動指針ガイドブックが示す多様な動き」を身に付けるための「様々な体験ができるような手立ての一つであり、(中略)豊かな人生を送るための基礎づくりに資すること」(三村2021:263-274)や、「能動的、可変的存在としての人間への発達を実現しようとするもの」(吉田2018:69)等の評価が見られる。

3) 「自由画」について

斎藤は1949年から児童美術の研究会で原子芸術研究家の宮武辰夫に子どもの絵からその心情を読み取ること、またエンゲルスの著書から子どもの発達と描画との関係を読み取るところを学んだ(斎藤公子記念館2011:150)。そして斎藤は子どもが「自らの頭のなかに描かれたイメージをどうしても表現したくて描く」ことを大切にされた(斎藤1997:184)。また子どもの絵の見方は「子どもの人権を本当に尊重するかどうかにもかかわる大切な問題」であり、周りの大人が人間の尊厳を認める姿勢を持つことで、子どもは自分を素直に出し、のびのびとした絵を描くことを述べた(斎藤1997:184)。「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」では、保育者は子どもの描く絵の聞き取りはするが、一切指導を行わず、絵はその子の脳に描かれたものを映し出したものであるとして、毎月の職員会議で全園児の自由画を並べてその育ちや悩みを読み取り、全職員で理解し、翌日以降の保育に活かしていたとされている(木村2025:16-18)。

4) 「文化財」について

斎藤は、保育者たち自身が優れた文学、芸術を理解することを大切にし、北埼玉保育問題研究会では作家の松谷みよ子や斎藤隆介を講師に迎えて学び、人形座の木村次郎と丸山亜紀と共に児童文化や子どものための音楽づくりをした。斎藤は、真の正しさ、美しさ、勇気を与え得る教材を選定し、子どもたちの心を揺さぶり、感動を促すことで、豊かな表現力を培うと考え、文化的な遺産を継承することおよび、文化を再生産していく力の形成を重視した(木村2025)。木村(2025)はさらに、付録に示された斎藤編著の保育絵本シリーズ全10冊には、斎藤の生き方、保育観、ヒューマニズムが反映されており、真の民主主義や平和な社会を求める姿勢、すべての子どもへの平等な愛、弱者への献身の心、人間としての真の美しさ、知恵、勇気が描かれていると評価している。柳田・斎藤(1986:184)には、当該保育について、「園長、保母、子どもとその父母をつらぬいて、近代の民主主義的な精神が根強く流れている」という評価が述べられている。

5) 「障害児・ゼロ歳児保育」について

先述の通り、斎藤は1960年代、障害児保育・ゼロ歳児保育がまだ一般的でない時代に、その必要性を感じ、実践を始動させた。本研究においてこれら両者を統合し、「発達保障の原点」と位置づけるのは、斎藤の著作や実践資料の分析を通じて、両者が子どもの全面発達を保障するという同一の目的に基づく不可分の実践として位置づけられていることが見出されたためである。斎藤は障害児保育を「人間教育の原点」(斎藤他1986:242)と捉え、脳の発達が著しい乳幼児期に、「自閉症児を含むすべての子どもたちの発達を保障する」(斎藤2007:98)ことを重視した。この共通の使命を果たすための方法論として、斎藤は両保育において、発達の大切な時期であるからこそ、心地よい「自然環境」下での遊びや「リズム遊び」を特に重視した。例えば、

ゼロ歳児室は、自ら不要な刺激を回避しにくい乳児のために、敷地内で最も環境の良い静かな場所に設置され、芝生の戸外へ自由に外に出られる構造とした。また、目を合わせて抱く目交(まなかい)や、赤ちゃん体操の「リズム遊び」を通して感性を育てることを大切にした(斎藤公子記念館2011:25-27)。さらに、この困難な実践を担う保育者には、知性、勇気、そして弱いものへの限りない献身の愛が必要な資質として重視されている。そのためには保育者自身が「自己の尊厳を決してかなぐり捨てない」姿勢を持ち、「真に美しいものを」求めて感性を育てることにより、「どの子ども人間としての尊厳、人間としての素晴らしい可能性をもっていることが分かる」と示している(斎藤他1986:223-241)。このように、実践の基礎となる環境・体づくりの重視と、それを支える保育者の精神性の確立が、先述した「ヒューマニズム」の具現化として、両保育に共通して要求される構造となっている。このような斎藤の姿勢を、作家の松谷みよ子(松谷1989:4-5)は、「表現しようとしないうちの心の中にかくれた芽を、いのちがけでみつめ、育てる」と表現している。また穂盛(2022:213-214)は、斎藤が亡くなる直前までその保育を撮影、記録する中で、医療の限界に直面した障害児たちが、斎藤や当該保育の実践園の中で手塩にかけて育つ様子を映像に収めた。

4. 総合考察：ヒューマニズムの理論的核の考察と、5つの特色との対応付け

第3章で提示された「自然環境」、「リズム遊び」、「自由画」、「文化財」、「障害児・ゼロ歳児保育」という5つの特色は、それぞれの展開過程や斎藤による言説を詳細に検討すると、それらすべてに通底するヒューマニズムの理論的核として、以下の3つの独自性が浮かび上がる。第一に、「社会変革的な性質のヒューマニズム」である。この特質は、最も弱い立場にある子どもの生命の可能性を最大限に保障しようとする実践、特に「障害児・ゼロ歳児保育」において顕著に認められる。またその思想の背景には、終戦直後の戦災孤児や、高度経済成長期における「うつろな瞳の子ども」(斎藤・川島1989:75)の増加といった時代と社会構造が生み出した弱者に対する強い眼差しと、「子どもがみんな笑える日まで」(斎藤他1986)という目標がある。これは、個人の慈愛に終わらず、最も弱い立場にある子どもの尊厳と生存権・発達権を社会全体で保障しようとする、社会福祉・社会変革的な要素を強く内包している。第二に、「発達科学と統合された性質のヒューマニズム」である。この特質は、「リズム遊び」や「自然環境」との相互作用において具体化されている。斎藤は、自らが抱く「子どもの生命の可能性を最大限に引き出したい」という願いを、感情論に留めるのではなく、ダーウィンの進化論や大脳生理学(表2参照)といった発達科学の知見を積極的に導入することで、科学的な方法論へと昇華させた。この「願い」と「科学」の統合こそが、5つの特色すべてを貫く普遍性と説得力を支える本質的な要因である。第三に、「実践と不可分な性質のヒューマニズム」である。この特質は、保育者が子どもの尊厳と主体性を認める民主的な姿勢を実践的に問う「自由画」や、真の民主主義と平和を求める価値観を次世代へ継承する手段としての「文化財」の活用、そして園長を含む

保育者が常に現場に立ち続ける姿勢に表れている。その思想は、「身をけずるほどの痛み」（斎藤1982:250）を伴う園創設や、斎藤が生涯保育者であり続けた姿勢、そして現在の「連絡会」やその他の実践園等による集団的・自立的な保育の科学的探求へと直結している。これらは、理念を机上のものに終わらせず、日々の実践の中で絶えず検証し体現していく、思想と実践の緊密な連携を示すものである。

以上の通り、本研究で抽出した5つの特色は、それぞれが独立した方法論として存在するのではなく、上述した3つの理論的核を多角的に体現し合うことで、一つの強固な実践体系を構築していることが明らかとなった。本研究における斎藤のヒューマニズムとは、「子どもの尊厳を重視し、社会変革の視点から発達科学を統合することで、すべての生命の可能性を最大限に引き出すことを目的とした、実践と不可分な保育思想」と定義できる。これら5つの特色は、この再定義された理念を実践へと落とし込むための不可欠な構成要素であり、当該保育の本質を体系的に捉える上での基盤をなしているのである。この構造を明示することは、今後、方法論の表層的な模倣（教条主義）を超え、理念に基づいた実践の多様性を認めるための理論的基盤となる。

5. 今後の課題と研究の展望

本研究は、「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の実践の本質を「ヒューマニズムに立脚」（斎藤・井尻1985:10）した5つの特色として体系的に提示した。しかし、その限界として、以下の今後の課題が残された。本論文で確立したヒューマニズムの理論的核（3要素）は、斎藤の思想の本質を捉えるものであり、これが1996年の分化後の両実践団体において、どのように継承・変容しているかについて、実証的な検討を行う必要がある。今後の研究を学術的に進める上で、両団体の比較検討や特定の保育の特色（例えば「リズム遊び」等）の個別テーマを検討する前段階として、まず各実践における現行の保育内容や理念の解釈を正確に記述し、その実態を把握することが不可欠である。今後は、本論文で再定義したヒューマニズムの3要素（「社会変革の視点」、「発達科学との統合」、「実践との不可分性」）を検討の視点として活用し、両団体の実践内容の差異が、表面的な技術的な相違に留まるのか、あるいは理念的・科学的基盤の解釈の相違にまで及んでいるのかを、実証的に検討する必要がある。この比較検討を通じて、本論文で問題提起した教条主義的模倣の実態と、理念の健全な継承・発展の具体的な方向性が明らかになるであろう。また、斎藤の現役中から引退後、そして没後の現代に至るまでの、実践園における保育内容の比較についても、今後の課題とする。

今後、本研究の成果（ヒューマニズムの理論的核と5つの実践体系）に基づき当該保育の研究を推進することは、現代の保育課題に対し、以下の学術的・実践的示唆をもたらすことが考えられる。第一に、2024年中央教育審議会諮問で示された「主体的に学びに向かうことができない子供」（文部科学省2024）の存在は、森上（2001）が、高度経済成長期以降、便利さや効率

と引き換えに、人間の生きる力に関わる大切なものの多くを失ったと指摘し、汐見(2024)が1980年代以降の乳幼児の自主性・自発性の育ちへの懸念を示すように、高度経済成長期から続く保育課題が現代も継続していることを示している。当該保育は、この課題に対し、自主的・主体的な育ちを科学的・思想的に保障し、約70年に渡り実践知を蓄積してきた。この実践体系を現代的課題に焦点を合わせ、詳細に検討することは、民主的且つ公正な社会の担い手を育てるという現代の保育・教育の喫緊の課題に対し、具体的な理論的・実践的な示唆を得る可能性を秘めている。第二に、近年各自治体で自然保育認証・認定制度が設立される中、当該保育施設のいくつかにおいては、認定の実態がある。また、「自然環境」や「リズム遊び」といった特色は、現代の発達科学的知見(脳科学等)と照らし合わせることで、その普遍性と独自性をさらに明確にすることができる。長年にわたる実践知を、現代の自然保育や科学の観点から再検討することは、現代的課題解決への有効な視点となるであろう。

謝辞

本研究にあたり、貴重なお話を提供して下さった「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の(元)実践者の方々に、心より感謝申し上げます。

<注>

¹⁾ 「斎藤公子とさくら・さくらんぼ保育」の実践園は、2025年現在も全国に約200ヵ園存在すると推測される。その内訳として、全国保育実践交流連絡会に所属する園が110ヵ園(2025年5月に「連絡会」会長に確認)あり、他に斎藤の保育理念や方法を取り入れた実践を行う園が数十ヵ園(園長らの出版物やホームページ確認に基づく)存在すると推定される。所属しない実践園は、斎藤の保育を取り入れた範囲や解釈が多様であるため、正確な数の断定は困難である。

²⁾ 全国保育実践交流連絡会は、『さくら・さくらんぼ保育資料室』のパンフレットに、「子どもの命を守り全面発達を保障する、科学的で民主的な保育の発展をめざし、多くの人々と手をつなぎ、地域に根ざした自主的な保育実践を交流しあい学びあっていく」ことを目的としています」とある。

³⁾ 北埼玉保育問題研究会は、保母(保育士)学校と呼ばれ、発足の1962年から斎藤・川島(1989:123)執筆の1989年当時まで、週に1回夜2時間開催されたと記録されている。

⁴⁾ 「さくら・さくらんぼ賛助会ニュース」は、「さくら・さくらんぼ保育資料室」で年に約1回約12ページの写真入りで発行している会員用ニュースである。当資料室は、さくらんぼ保育園の敷地内の別棟にあり、そのパンフレットには「保育の基礎が学べ、子どもの命と権利と発達を守り、民主的科学的保育を全国に発信できる場にしていくことを目指します」と理念が記されている。

- ⁵⁾ 活動の分化および和解に関する事項、並びに「連絡会」の活動については、資料に加え、斎藤の現役時代を直接知る関係者6名への聞き取り調査に基づき記述した。
- ⁶⁾ 『DVDブック 映像全集・斎藤公子の保育』には、「対話 保育者と脳科学者の1時間」「保育園の立地・設計 理想的な環境作り」、「斎藤公子のリズム遊び」、「子どもたちの絵が語るもの—描画—」、「トスカの微笑み—障害児保育の実例—」、「斎藤公子の語り聞かせ『錦の中の仙女』」の6つの表題がつけられている。また、晩年に斎藤は自身の保育をまとめた『映像で観る 子どもたちは未来』では、「乳幼児の生活・保育園の日々」、「絵に観る子どもの心と体」、「赤ちゃんの育て方—生きる力を育む—」、「楽しく、しなやかにリズム遊び」、「永遠のしごと—文化を紡ぐ—」の5つのテーマを掲げている。

引用文献

- 原陽一郎 (2011) 「斎藤公子の保育実践の継承と発展を考える」宍戸健夫・秋葉英則・小泉英明・太田篤志・原陽一郎・石木和子『子育て錦を紡いだ保育実践—ヒトの子を人間に育てる—』エイデル研究所
- 原陽一郎 (2021) 「井尻正二が斎藤公子の保育実践に与えたもの」『日本の科学』56(3)、pp.22-27
- 広木克之 (1985) 「復刊にあたって—斎藤公子先生の保育思想を学ぶ意味—斎藤公子・井尻正二『斎藤公子の保育論』築地書館
- 穂盛文子 (2022) 「「トスカ」の微笑み—斎藤公子と障害児保育—」前田綾子・富岡美織『イラスト版斎藤公子さくら・さくらんぼリズム遊び』Kフリーダム
- 今泉良一 (2019) 「子どものリズム表現に関する一考察—「さくら・さくらんぼ保育」「音楽教育の会」の資料を手がかりとして—」『東洋大学大学院紀要』55、pp.65-78
- 入江眞理 (2022) 「斎藤公子の「リズム遊び」における身体運動の意義に関する研究—幼児期の「多様な動きの経験」を視点として—」『環境と経営』28(2)、pp.263-274
- 木村友紀 (2024) 「自然環境を活用した保育における人と関わる力に関する研究—さくら・さくらんぼ保育の実践園を題材にして—」『教育学研究紀要』70、pp.604-605
- 木村友紀 (2025) 「卒園期の5歳児を対象とした絵本の選定に関する研究—斎藤公子の保育絵本全10冊を題材にして—」『絵本学会研究紀要』27、pp.11-23
- 惟任泰裕 (2018) 「斎藤公子の保育実践に関する一考察」『教育科学論集』21、pp.15-25
- 松谷みよ子 (1989) 「ここには日本を拓く子らがいる」斎藤公子・川島浩『あすを拓く子ら』創風社
- 森上史朗 (2001) 「第10章 現代社会と保育内容の課題」森上史朗・大豆田啓友・渡辺英則編『新・保育講座④ 保育内容総論』ミネルヴァ書房、pp.202-203
- 三村真由美 (2021) 「よこはまりズム研修会の「さくら・さくらんぼのリズム遊び」の特徴と成果：保育士の学びに着目して」『エリザベト音楽大学研究紀要』(41)、pp.41-52
- 斎藤公子 (1982) 『子育て—錦を織るしごと—』労働旬報社

- 斎藤公子 (1994) 『さくら・さくらんぼのリズムとうた ヒトの子を人間に育てる保育の実践』群羊社
- 斎藤公子 (1997) 『子育てに魅せられて 奥深き未知の国』青木書店
- 斎藤公子 (2006) 『子育て 織りなした錦 乳幼児の発達の可能性は果てしない』フリーダム
- 斎藤公子 (2007) 『生物の進化に学ぶ 乳幼児期の子育て』フリーダム
- 斎藤公子 (2021) 『DVDブック映像全集 斎藤公子の保育』Kフリーダム
- 斎藤公子・浅尾忠男・清水寛 (1986) 『子どもがみんな笑える日まで』創風社
- 斎藤公子・川島浩 (1976) 『あすを拓く子ら さくら/さくらんぼ保育園の実践』あゆみ出版
- 斎藤公子・川島浩 (1989) 『あすを拓く子ら さくら・さくらんぼの保育実践』創風社
- 斎藤公子・小泉英明 (2008) 『映像で観る 子どもたちは未来—乳幼児の可能性を拓く—第Ⅰ期』フリーダム
- 斎藤公子・小泉英明 (2009) 『映像で観る 子どもたちは未来—乳幼児の可能性を拓く—第Ⅱ期』フリーダム
- 斎藤公子記念館 (2011) 『DVDブック・映像で見る子どもたちは未来・第Ⅲ期乳幼児の可能性を拓く』フリーダム
- 齋藤公子を偲ぶ会 (2010) 『斎藤公子追悼文集』博字堂
- さくら・さくらんぼ保育資料室 (2020) 『賛助会ニュース第16号』さくら・さくらんぼ保育資料室運営委員会
- 宍戸健夫 (1980) 「五 保育実践の展開—さくら・さくらんぼ保育園の実践を中心に—」岡田正章・久保いと・坂元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史朗 編纂『戦後保育史 第2巻』フレーベル館、pp. 323-344
- 宍戸健夫 (2011) 「さくら・さくらんぼ保育園の保育実践—その特色」宍戸健夫・秋葉英則・小泉英明・太田篤志・原陽一郎・石木和子『子育て錦を紡いだ保育実践—ヒトの子を人間に育てる—』エイデル研究所、pp. 8-18
- 汐見稔幸 (2024) 「展望」『保育学研究』62(1)、pp. 143-152
- 新村出 (2018) 『広辞苑 第七版』岩波書店
- 文部科学省 (2024) 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」中央教育審議会諮問
https://www.mext.go.jp/content/20241226-mxt_kyoiku01-000039494_1.pdf
 (最終閲覧日 2025. 10. 1)
- 和久田佳代 (2019) 「感覚運動経験を大切にした保育—さくら・さくらんぼ保育の実践から—」『聖隷クリストファー大学社会福祉学部紀要』17、pp. 9-20
- 柳田謙十郎・斎藤公子 (1986) 『哲学と保育』創風社
- 吉田直哉 (2018) 「斎藤公子の「リズムあそび」に見る生物=進化的モメントの臨界期」『大阪府立大学紀要』14、pp. 59-71

付録 斎藤公子の著書、映像、関連書

出版年・月	書籍・映像名	著者(編者・監修・監督)	出版社
【第1期】			
1955.10	ぬいぐるみの動物 UALシリーズ16	斎藤公子・ 日本ユネスコ美術教育連盟(編集)	美術出版社
【第2期】			
1962	三歳児	武田敦(監督)・山崎定人(助監督)	共同映画社
1972.9	小鳩よはばたけ	浅尾忠男	鳩の森書房
1976.12	あすを拓く子ら さくら/さくらんぼ保育園の実践	斎藤公子・川島浩(写真)	あゆみ出版
【第3期】			
1977.5	さくらんぼ坊や1 幼児の全面発達を求めて	山崎定人(監督)	青銅プロ・ 共同映画社
1979.6	ひとの先祖と子どもたちのおいたち (みんなの保育大学シリーズ1)	井尻正二・斎藤公子(付言)	築地書館
1980.2	自然・人間・保育	柳田謙十郎・斎藤公子	あゆみ出版
1980.3	さくらんぼ坊や2 模倣と自立	山崎定人(監督)	青銅プロ・ 共同映画社
1980.5	子どもの発達とヒトの進化 (みんなの保育大学シリーズ2)	井尻正二・斎藤公子(付言)	築地書館
1980.11	さくら・さくらんぼのリズムとうた ヒトの子を人間に育てる保育の実践	斎藤公子	群羊社
1980.12	手のうごきと脳のはたらき (みんなの保育大学シリーズ3)	香原志勢・斎藤公子(付言)	築地書館
1981.1	さくらんぼ坊や3 言葉と自我	山崎定人(監督)	青銅プロ・ 共同映画社
1981.5	足のはたらきと子どもの成長 (みんなの保育大学シリーズ4)	近藤四郎・斎藤公子(付言)	築地書館
1981.10	脳の発達と子どものからだ (みんなの保育大学シリーズ5)	久保田競・斎藤公子(付言)	築地書館
1982.3	さくら・さくらんぼの障害児保育	斎藤公子(編著)	青木書店
1982.7	さくらんぼ坊や4 4歳と仲間	山崎定人(監督)	青銅プロ・ 共同映画社
1982.8	子育て一錦を織るしごと	斎藤公子	労働旬報社
1982.8	内臓のはたらきと子どものころ (みんなの保育大学シリーズ6)	三木成生・斎藤公子(付言)	築地書館
1982.12	進化とはなにか (みんなの保育大学シリーズ7)	井尻正二・斎藤公子(付言)	築地書館
1983.3	子どもはえがくーさくら・さくらんぼ、 姉妹園の子どもたちー	斎藤公子	青木書店
1983.5	胎児からの子育て (みんなの保育大学シリーズ8)	大島清・斎藤公子(付言)	築地書館
1983.12	さくらんぼ坊やの世界 ー乳幼児の育ちゆくみちすじ	斎藤公子・山崎定人	労働旬報社
1984.1	さくらんぼ坊や5 5歳と仲間	山崎定人(監督)	青銅プロ・ 共同映画社
1984.4	[写真集]ヒトが人間になる さくら・さくらんぼ保育園の365日	川島浩(写真)・斎藤公子(文)	太郎次郎社
1984.9	歯の健康と子どものからだ (みんなの保育大学シリーズ9)	落合靖一・斎藤公子(付言)	築地書館
【第4期】			
1985.1	鼻のしくみと子どもの成長 (みんなの保育大学シリーズ10)	高橋良・斎藤公子(付言)	築地書館

1985.2	斎藤公子の保育論[新版]	斎藤公子・井尻正二	築地書館
1985.5	さくらんぼ坊や6 自治と創造	山崎定人(監督)	青銅プロ・共同映画社
1985.5	斎藤公子の保育絵本 サルタン王ものがたり (保育絵本シリーズ1)	斎藤公子(編者)	青木書店
1985.6	斎藤公子の保育絵本 錦の中の仙女 (保育絵本シリーズ2)	斎藤公子(編者)	青木書店
1985.8	さくら・さくらんぼの子どもたち —100人のアリサが巣立つとき	斎藤公子・山崎定人	労働旬報社
1985.11	目のはたらきと子どもの成長 (みんなの保育大学シリーズ11)	潮崎克・斎藤公子(付言)	築地書館
1985.11	斎藤公子の保育絵本 黄金のかもしか (保育絵本シリーズ3)	斎藤公子(編者)	青木書店
1985.11	保育の未来を考える	斎藤公子・井尻正二	築地書館
1986.3	完成台本 アリサ	斎藤公子・山崎定人・小島義史・ ふじたあさや	青銅社
1986.4	アリサ ヒトから人間への記録	山崎定人(監督)	青銅プロ・共同映画社
1986.6	子どもの健康と楽しい運動 (みんなの保育大学シリーズ12)	武藤芳照・斎藤公子(付言)	築地書館
1986.9	哲学と保育(斎藤公子保育実践全集①)	柳田謙十郎・斎藤公子	創風社
1986.11	子どもがみんな笑える日まで (斎藤公子保育実践全集②)	斎藤公子・浅尾忠男・清水寛	創風社
1986.12	斎藤公子の保育絵本 森は生きている 12月のものがたり(保育絵本シリーズ4)	斎藤公子(編者)	創風社
1987.1	女性は地球を守る	住井すゑ・斎藤公子	創風社
1987.1	血液の謎と子どもの成長 (みんなの保育大学シリーズ13)	岡本彰祐・斎藤公子(付言)	築地書館
1987.3	さくら・さくらんぼこどもかるた	斎藤公子(監修)・秋岡芳夫(字)	創風社
1987.4	保育とはなにか—対談 (斎藤公子保育実践全集③)	斎藤公子・秋葉英則・宍戸健夫・ 田中正人・広木克之	創風社
1987.12	写真集 100人のアリサ (斎藤公子保育実践全集④)	斎藤公子・川島浩	創風社
1988.7	愛と変革の保育思想	斎藤公子・ 松田解子	創風社
1989.4	6歳児の保育と保育思想の発展 (斎藤公子保育実践全集⑤)	斎藤公子・ 広木克之	創風社
1989.5	とねっこ保育園の画集	斎藤公子(編者)	創風社
1989.8	あすを拓く子ら (斎藤公子保育実践全集⑥)(新版)	斎藤公子・ 川島浩(写真)	創風社
1990.4	斎藤公子編集 金のにわとり (保育絵本シリーズ5)	斎藤公子(編者)	創風社
1990.4	永遠のいのちと保育	斎藤公子	創風社
1990.5	斎藤公子編集 わらしべ王子 (保育絵本シリーズ6)	斎藤公子(編者)	創風社
1990.12	胎児化の話 (みんなの保育大学シリーズ)	井尻正二・ 斎藤公子(付言)	築地書館
1990.10	子どもたちの未来のために	塩田庄兵衛・ 斎藤公子	創風社
1990.10	斎藤公子編集 青がえるの騎手 (保育絵本シリーズ7)	斎藤公子(編者)	創風社
1992.10	斎藤公子編集 つばめがはこんだ南のたね (保育絵本シリーズ8)	斎藤公子(編者)	創風社
1994.1	斎藤公子編集 森の中の三人の小人 (保育絵本シリーズ9)	斎藤公子(編者)	創風社

1994. 9	改定版 さくら・さくらんぼのリズムとうた ヒトの子を人間に育てる保育の実践	斎藤公子	群羊社
1994. 12	もう一つの明治維新—中沼了三と隠岐騒動—	斎藤公子・中沼郁	創風社
1995. 2	斎藤公子編集 泥沼の王の娘(保育絵本シリーズ10)	斎藤公子(編者)	創風社
1995. 10	木下順二・民話の世界	木下順二・塩田庄兵衛・斎藤公子	創風社
1997. 7	新編 子どもはえがく 「さくらんぼ坊や」の子どもたち	斎藤公子	青木書店
1997. 9	子育てに魅せられて 奥深き未知の国	斎藤公子	青木書店
2006. 3	子育て・織りなした錦 乳幼児の発達の可能性は果てしない	斎藤公子	フリーダム
2007. 8	生物の進化に学ぶ 乳幼児期の子育て	斎藤公子	フリーダム
2008. 11	脳科学と芸術	小泉英明・斎藤公子	工作社
2008. 12	映像で観る 子どもたちは未来 —乳幼児の可能性を拓く— 第Ⅰ期(子どもたちは未来シリーズ)	斎藤公子(監修)・ 小泉英明(監修)・ 穂盛文子(監督)	フリーダム
【第5期】			
2009. 10	映像で観る 子どもたちは未来 —乳幼児の可能性を拓く— 第Ⅱ期(子どもたちは未来シリーズ)	斎藤公子(監修)・ 小泉英明(監修)・ 穂盛文子(監督)	フリーダム
2010. 4	斎藤公子追悼文集	斎藤公子を偲ぶ会	博字堂
2010. 8	新装版 さくら・さくらんぼの障害児保育	斎藤公子	青木書店
2010. 10	新装版 子どもはえがく 「さくらんぼ坊や」の子どもたち	斎藤公子	青木書店
2010. 12	乳幼児のための脳科学 DVDブック 子どもたちは未来・乳幼児の可能性を拓く・ 別巻(子どもたちは未来シリーズ)	小泉英明(編著)・ 穂盛文子(監督)	フリーダム
2011. 4	子育て 錦を紡いだ保育実践 —ヒトの子を人間に育てる—	穴戸健夫・秋葉英則・小泉英明・ 太田篤志・原陽一郎・石木和子	エイデル研究所
2011. 11	映像で観る子どもたちは未来・ 乳幼児の可能性を拓く 第Ⅲ期 (子どもたちは未来シリーズ)	斎藤公子記念館(編集)・ 穂盛文子(監督)	フリーダム
2016. 12	斎藤公子の保育論[新版]	斎藤公子・井尻正二	築地書館
2019. 7	普及版 子どもは描く ^{えが}	斎藤公子・ 斎藤公子の部屋(佐藤幸紀)	Kフリーダム
2019. 7	改訂版 さくら・さくらんぼの障害児保育	斎藤公子	Kフリーダム
2019. 7	絵で見る 斎藤公子のリズムあそび	原屋文次	Kフリーダム
2019. 11	斎藤公子監修 名作絵本 黄金のかもしか(復刊)	斎藤公子・ 斎藤公子の部屋(佐藤幸紀)	Kフリーダム
2019. 11	斎藤公子監修 名作絵本 錦のなかの仙女(復刊)	斎藤公子・ 斎藤公子の部屋(佐藤幸紀)	Kフリーダム
2019. 11	斎藤公子生誕100周年記念出版 リズム遊びが脳をはぐくむ	大城清美(編集)・ 穂盛文子(映像監督)	太郎次郎社 エディタス
2019. 12	斎藤公子監修 名作絵本 森はいきている(復刊)	斎藤公子・ 斎藤公子の部屋(佐藤幸紀)	Kフリーダム
2019. 12	斎藤公子監修 名作絵本 サルタン王ものがたり(復刊)	斎藤公子・ 斎藤公子の部屋(佐藤幸紀)	Kフリーダム
2021. 5	DVDブック映像全集 斎藤公子の保育(全6巻)	斎藤公子(編著)	Kフリーダム
2022. 9	イラスト版 斎藤公子さくら・さくらんぼリズム遊び	前田綾子・富岡美織(編著)・ 荻原風佳(絵)	太郎次郎社 エディタス

※2章に対応して「第1期～第4期」を時期区分し、さらに「第5期」を加えたものである。出版月が記載していないものは不明のものである。題名の後の()内は、シリーズ名、復刊等を筆者が記載したものである。